# コラージュ作品の分析に関する試論
## ——コラージュ作品とロールシャッハ・テストの結果の比較——

寺　西　佐稚代*・伊　藤　義　美**

# A Study on an Analysis of Collage Works : A Comparison of Collage Works and Result of Rorschach Test

Sachiyo TERANISHI* and Yoshimi ITO**

Abstract

The aim of this paper is to investigate an analysis of Collage works. So I compared the first Collage works with the Rorschach data of two clinical cases. As a result, it is firstly suggested that there are two defense mechanisms of the objectization and beautification in the Collage expression, and then the possibility is also suggested that they are represented by not only the content but olso the way of pasting on, from the comparison of the material content of Collage works with the response content of Rorschach test. Secondly, it is suggested that there is a relevance between the material color of the Collage and Σ C. Thirdly, it is suggested that there is a similarity between the number of the Collage fragments and the total response number of Rorschach. Besides, cutting off the materials into small pieces implies the subdivision of color stimuli which the materials have. This way of cutting off corresponds to the dominant position of the usual large detail responses of color cards in Rorschach.

**Key words**：コラージュ作品 (Collage works)，ロールシャッハ・テスト (Rorschach test)，内容の比較 (comparison of content)，臨床例 (clinical case)

*　名古屋大学大学院人間情報学研究科（博士課程後期課程）
Graduate School of Human Informatics, Nagoya University (Doctoral Course)
**　名古屋大学情報文化学部　School of Informatics and Sciences, Nagoya University

## Ⅰ．はじめに

コラージュ（collage）とは，もともとはフランス語のcollerに由来する言葉で「糊による貼り付け」を意味している。実際には，雑誌やパンフレットなどから写真やイラスト，文字を自由に切り取って台紙に貼り，本来は相互にあまり関係の無いものを自由に組合せることによって自己を表現するものである。

コラージュ作品を作るのは比較的簡単なこともあって，医療・教育・司法など様々な心理臨床の分野で実施されていることが報告されている。しかし，表現されているものが何を意味しているのか，それをどのように読み取るのかについての研究はまだ見られず，分析方法はこれからの課題でもある。森谷（1999）は，コラージュ作品を見る際の判断軸の仮説として，「自己像，時間，空間，前景―近景，アニマ―アニムス，運動，美しい―雑な，意味のある―意味のない，内容―形式」などを挙げている。そしてすべての判断軸をすべての作品に当てはめて評価するのではなく，その作品の特徴が一番よく現われている物差しのみを当てはめればよい，と述べている。森谷（1993）はコラージュ技法の特徴を「オープン・アーキテクチャ（開かれた設計思想）」と名付けた。これは，従来のアセスメントの方法が，刺激材料・手続き・解釈法が標準化されているという特徴から，「クローズド・アーキテクチャ（閉じられた設計思想）」と呼び，対比させた考えである。コラージュでは，刺激材料と手続きは相当自由である。それゆえに，偶然的な表現が生じる可能性が大きく，そこにアセスメントの困難さが起きてくる。コラージュを臨床場面で用いる場合，作品の継起の中での内容や主題，表現形式の変化が重要であり，「表現されること自身が，そのまま治療関係に支えられた大事なコミュニケーション・プロセスであり，その場の関係性が織り込まれることによって初めて，表現が可能となる」（河野・岡田，1997）ことを忘れてはならない。しかし，一枚一枚の作品から，あるいは作品の流れや変化が，何を意味しているのかを読み取っていくことも同時に重要なことと思われる。

中井（1993）は，「コラージュは，構成法でありながら，ロールシャッハ的なところに一つの基盤を持っている」と述べ，コラージュは構成法でありながら投影法的でもあるといっている。また，杉浦（1994）は，コラージュ療法を絵画療法と箱庭療法のちょうど中間に位置付け，心理テストの中ではロールシャッハにもっとも近いと述べている。そして，コラージュの使用素材数とロールシャッハの反応数の発達曲線の類似，内容的にも人間や動物の反応の発達曲線の類似を報告している。

本論文では，２事例のコラージュの初回作品とロールシャッハ・テストの結果を比較することによって，コラージュ作品の分析方法について検討する。２事例ともロールシャッハ・テストは心理療法の開始前に行なわれ，コラージュの初回作品は治療の初期の段階で作られたものである。なお，コラージュは大コラージュ・ボックス法[1]で実施したものであり，ロー

ルシャッハ・テストのスコアリングは名古屋大学式技法によるものである

## II．事例の提示

〈事例1〉10代後半の女性。主訴は，不登校と抑うつ状態。

［ロールシャッハ・テスト・プロトコール］

| Response | Inquiry |
|---|---|
| I：13″ | |
| ①∧顔 | ハロウィンのカボチャのお化けの顔。目，牙が空洞っぽい。目がつり上っている。色が黒いからあまりいいものではない。 W (Si) FC′+ Mask |
| ②∧ふたりの天使 39″ | 頭，目，手，羽，足。 W F+ H／ |
| II：5″ | |
| ①∧建物の屋根 22″ | 白いところがモスクの屋根に見えた。(？)丸い感じがするから。(屋根の他は)暗い空。(？)黒いから。 $D_2$ (So) FC′+ Arch |
| III：3″ | |
| ①∧ふたりの人が壺か何かを運んでいる 23″ | $D_1$ と $D_1$ がふたりの人。頭，靴。$D_6$ が壺。何となく形が似ている。 $D_{3B}$ $M_a$+ H Hh P |
| IV：8″ | |
| ①∧人の体を下から見たところ 25″ | 頭が小さくなっている。手，足。$D_1$ は入らない。(下から)足が大きくて上にいくほど小さく見えるから。巨人。怖そう。大きくて威圧的だから。 W FV+ H |
| V：13″ | |
| ①∧こうもり 25″ | 頭，羽。(？) 色が黒いから。 W FC′+ A P |
| VI：20″ | |
| ①∧動物の毛皮。じゅうたんにしてあるやつ 37″ | 頭，前足，後ろ足。(毛皮)広げてある感じがしたから。 W F+ Aob |
| VII：29″ | |
| ①∧二匹のリス 39″ | $D_1$，しっぽ，頭，前足。$D_4$+$D_7$ が木に見えた。枝に止まっているリス。(木) ごつごつした感じ。<エッジをなぞる>でこぼこしているから。 W F+ A Tree |
| VIII：17″ | |
| ①∧何かの顔。ガイコツみたい | $D_{S4}$ 顔，$D_3$ 帽子，$D_6$ マントの上の方。(ガイコツ) 顔がやつれた感じ，ぎすぎすしている。 $D_5$ F− Hd Cg |
| ②∧動物が二匹 52″ | $D_{1+1}$ カメレオン。前足，後ろ足，しっぽ。(カメレオン)しっぽがトカゲっぽい。 $D_{1+1}$ F+ A P |
| IX：6″ | |
| ①∧炎 37″ | 全体的に炎。(？)$D_{1+1}$ 燃えているときの形に。赤，オレンジは火の色。グラデーションぽいところ。 W FC+ Fi |

| | |
|---|---|
| X：35″<br>①/\お城で閉ざされた感じ<br>1′13″ | いばら姫のお城のよう。絡み付いているから上の方しか見えない。(？)お化けとか植物が絡み付いている。$D_1$ と $D_{4+13}$ はお化け，顔，目がある。$D_1$ はお化けだけど植物にも見える。つたのような植物。お城の塔に見える。 W　F－　Arch　Bot　H／ |

[Summary Scoring]

R＝12　Rej＝0　VIIIIX X％＝33.3　F％＝50.0　F＋％＝66.7　R％＝83.3　W：M＝8：1

M：FM＝1：0　M：ΣC＝1：0.5　FC：CF＋C＝1：0　P＝3　A％＝33.3

H＋A／Hd＋Ad＝7／2　T／1R＝14.9　T／ach＝16.6　T／C＝13.2

W％＝66.7　D％＝33.4　Content Range＝8　A＝3　Aob＝1　H＝2

H／＝2　Hd＝1　Mask＝1　Cg＝1　Hh＝1　Tr＝1　Bot＝1

Arch＝2　Fi＝1

［ロールシャッハ・テストの特徴］

総反応数が12個と生産性は少なめである。運動反応，色彩への反応が，1個ずつしかなく，内的な観念活動も情緒的な刺激に対する反応も抑制されている状態が示されている。情緒的な刺激に対して，領域的にそれらを排除したり（II・IIIカード），色彩の取り入れを排除した形態のみの反応であったり（VIII・Xカード），「建物の屋根（IIカード）」「お城の塔（Xカード）」のように表象を硬い物体にするなど，隔離や物体化の防衛によって，不安や不快な感情を意識から切り離そうとしている。しかしそれらは，暗い空に屋根だけがぽっかり浮かんでいるものであったり（IIカード），お化けや植物が絡み付いてお城の塔の部分だけしか見えないものであったり（Xカード），防衛の不全，自己不全感が窺われる。また，「いばら姫。閉ざされた感じ（Xカード）」と，不安や脅威を感じる外界から幾分自己愛的な世界に退避しやすい可能性も考えられる。

［コラージュ作品の特徴］

切片数は5枚。比較的大きめの写真。内容としては，ほぼ中央に塔のそびえ建つ教会の建物，左上に石作りの建物の内部，右上に古い書物，左端にモノクロ写真の下着姿の女性，右下に女性の足元が貼られている。色彩は明るいものはなく，抑えた感じのもの，冷たい感じのするもので占められる。重ね貼りが見られる。キャプションは「鮮やかに」，タイトルは「夕暮れ」である。（図1参照）

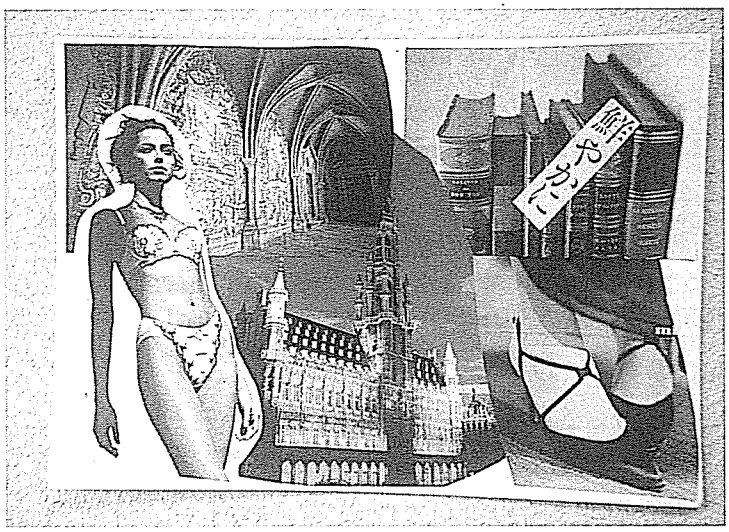

図１　事例１のコラージュ作品「夕暮れ」

〈事例２〉30 代前半の女性。主訴は，拒食症。

［ロールシャッハ・テスト・プロトコール］

| Response | Inquiry |
|---|---|
| Ⅰ：5″ | |
| ①∧こうもり | 頭，羽を広げている。（他？）黒っぽいところ。W　$FM_1$　FC′＋　A　P |
| ②∧鬼 | 角，目，牙，鬼の顔。W　（Se）　F＋　Hd／ |
| ③∧昆虫か蝶が飛んでいる | 目，羽を広げている。蝶。　W　$FM_1$＋　A |
| ④∧切り絵みたい。折り紙を折った　2′07″ | 左右対称になっているので，折って切ったように。（？）おそらく手でちぎった感じ。真っすぐではなく，がたがたしているから。　W　F＋　Art |
| Ⅱ：13″ | |
| ①∧クマか何か動物が２匹向かい合っている　1′17″ | 鼻，顔，耳，手，足。ころっとしている感じと黒っぽい色がクマみたい。　$D_{1+1}$　$FM_1$　FC′＋　A　P |
| Ⅲ：35″ | |
| ①∧水をつついている置物。２つあって | 顔，羽，足，くちばし，鳥の形。足がこんなに長くて変だと思いますけど。$D_6$ は水（？）〈首を傾げる〉　$D_3$　F＋　A′　Toy |
| ②∧こうやると女性っぽく見えて | $D_1$ 髪をアップにして，顔，鼻，胸，手，足。（女性？）胸があったから。$D_1$　F＋　H　P |
| ③∨こうやるとガイコツに見える | $D_8$ がガイコツの顔，首，体，手。ガイコツの上半身で足はない。頭の感じが特にガイコツに。　$D_{1+8}$　F＋　Hd |
| ④∧真ん中の赤いのは蝶　1′54″ | 蝶というより蝶ネクタイ，リボン。（？）リボンですね。形や色もそうかな。$D_4$　FC＋　Orn |
| Ⅳ：5″ | |

| | |
|---|---|
| ①∧クマか何かの毛皮。ばーんと干してある。 | 頭，手，足，体。ぼやけた感じが毛のようなもさもさした感じに見える。この色の濃淡が。これが黄色や赤だったら毛皮には見えないかも。W　FT　FC′+　Aob　P |
| ②∨紋章のような　1′5″ | ランプのようにも見える。$D_1$ の先が王冠，$d_2$ が炎のような形。W　F−　Emb |
| V：6″ | |
| ①∧蝶かこうもり　56″ | こうもりですね。羽を広げて，足，頭。色も黒いし。　W　FC′+　A　P |
| VI：1′52″ | |
| ①∨花　1′59″ | $D_2$ 花びら，蘭のような花。花弁，$D_7$ は茎，葉。花びらがクローズアップされているような，アンバランスだけど。　W　F+　Flo |
| VII：7″ | |
| ①∧顔の感じが女の人みたい　1′31″ | 鼻，顔，髪の毛，胸から上の上半身。$D_{1+1}$　F+　Hd |
| VIII：27″ | |
| ①∨蘭の花 | $D_2$ 花びら，色が奇麗なのとびらびらした形が。$D_6$ 葉，色が緑なのと形が。　$D_{2+6}$　FC+　Flo |
| ②∨顔のようにも見えるし | $D_6$ ロでにーと笑っている。$D_{9+9}$ 目。$D_{2+1}$ 髪の毛。W　F−　Hd |
| ③∧水性絵の具を垂らしたような　1′26″ | ぼやけた感じが水性絵の具を垂らしたように。色が水に浮かすとぼやーと広がる感じに。　W　C−　St |
| IX：1′5″　Rej | |
| 今までのより勢いがあるような・・・・何か実体のあるものとは見えない | Add　$D_{1+1}$ 炎っぽい。形も色もそうですね。 |
| X：30″ | |
| ①∨ロ，鼻，何かの顔かな | $D_{12}$ ロ，にーと笑っている。形が笑っているように見える。$D_{10}$ 鼻。$D_{7+7}$ 目。$D_{S15}$ (Se)　F−　Hd |
| ②∧竜の落し子のような | 鼻，体，でこぼこしたところ。　$D_5$　F+　A |
| ③∧雪の結晶に見えないでもない　1′35″ | 色とぎざぎざしたかんじ。　$D_1$　CF+　Nat |

[Summary Scoring]

R＝20　Rej＝1 (Card　IX)　VIIIXX％＝30.0　F％＝55.0　F＋％＝72.7　R＋％＝80.0
W：M＝10：0　M：FM＝0：3　M：ΣC＝0：3.5　FC：CF＋C＝2：2　P＝5
A％＝35.0　H＋A／Hd＋Ad＝8／5　T／1R＝26.7　T／ach＝27.0　T／C＝26.3
W％＝50.0　D％＝50.0　Content Range＝9　A＝5　A／＝1　Aob＝1　H＝1　Hd＝4
Hd／＝1　Emb＝1　Orn＝1　Art＝1　Toy＝1　Flo＝2　Nat＝1　St＝1

［ロールシャッハ・テストの特徴］

総反応数は20個とやや少なめではあるが，適量範囲を示している。図版を盛んに回転し自らが関わりやすいように外界を変化させるが，反応の成功につながらないことも多く，Ⅸカードに拒否が見られる。人間運動反応が全く見られず，動物運動反応も動きに乏しく姿勢に近いものである。観念活動が抑制されている状態で，内面的統制を行なう自我の柔軟性や弾力性が未発達であることが推測される。しかもそれらはⅠ・Ⅱカードに限定されており，新奇場面では運動感覚が活動しているが，場面になれてくると次第に抑制が働くことが示される。領域選択は色彩カードでの部分反応が優位である。これは情緒刺激に対して刺激を細分化しないと扱えず，全体として反応しようとすると，全体反応の「にーと笑った顔」や「水性絵の具を垂らしたもの」（Ⅷカード）と形態質の低い曖昧な反応になってしまう。また，「蝶」が「蝶ネクタイ」に変更されたり（Ⅲカード），「鳥の形の置物（Ⅲカード）」，「紋章（Ⅳカード）」「雪の結晶（Ⅹカード）」と表象を物体にしたり，「花（Ⅵカード）」「蘭の花（Ⅷカード）」と表象を美しいものにするなど，物体化や美化の防衛が推測される。これらの防衛は，形態質が低下したり，白黒カードでも「花」と，防衛が不安定になったり過剰になったりする。Ⅸカードでは反応拒否があり，付加反応として「炎」と述べている。防衛が期待どおりの水準で維持できなくなると，全面的に外界に引きこもってしまうことも考えられる。また，付加反応の内容からは，その背景には未分化な衝動性が隠されていることが推測される。

［コラージュ作品の特徴］

切片数は10枚。全ての切片が丸みを帯びた曲線で小さく切断されている。内容としては，左上にお城，中央上に崖と山の風景，右上に岩山と草原の風景，中央下にコスモス畑と道路の風景，それをはさんで左側にお祭りのイルミネーション，その下に小さく川と橋，着飾った少女，右側に花瓶にいけられた花，露天風呂，下に木製のテーブルと椅子の置かれた庭が貼られている。色彩は，上側が青や緑系統のどちらかというと寒色系で，下側が赤，黄，ピンクのどちらかというと暖色系と緑である。重ね貼りが見られる。キャプションは「光と風が降り注ぐ」「素敵な自分に変わる時」「Dream」，タイトルは「Dream」である。（図2参照）

## Ⅲ．考　察

コラージュの作業には，手渡された写真を“選択する・切る・置く・貼る”のプロセスがある。それは，既成の写真や絵から対象を発見し，ハサミによって切断するわけで，中井(1993)によれば，ロールシャッハの図形を「読む」時のような「見立て」「ひねり」のもとに行なわれるのである。一方，ロールシャッハ・テストは，自由反応段階では，インクのしみを何かに見立てることを求められ，質疑段階では見立てたもの，つまり反応語の現実検討をし直すことが求められる。インクのしみの見立てについて，馬場（1995）は，「被験者の身についた

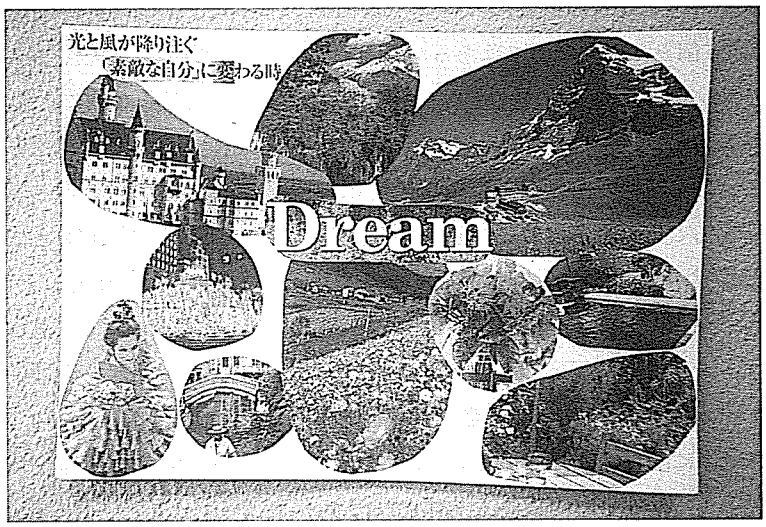


図2　事例2のコラージュ作品「Dream」

ものの見方，考え方，連想の仕方をこめたものであって，これを私は“広い意味での投影”と呼びたい。つまりそれは，その人の内面にあるものを外界に投げかけ，多少とも外界を自分流に色づけしてみることを指す」と述べている。

そこで，コラージュとロールシャッハ・テストで何が見立てられたか，つまり素材の内容と反応内容について検討する。事例1のコラージュの素材内容とロールシャッハの反応内容で共通するものは，コラージュの素材内容の“塔のそびえ建つ教会の建物”“石作りの建物の内部”，ロールシャッハの反応内容の“建物の屋根”“お城”である。ロールシャッハで表象を硬い物体にする物体化の防衛が示されたことから，これらはコラージュにおける物体化の防衛の有り様が示唆される。事例1のクライエントは「イタリアとかの昔っぽい建物と，下着や靴とかの現代的なものが共存している」と作り終えた後に述べたが，それはクライエントの中の硬いものと柔らかいもの，過去と現在の共存，あるいはバランスのようでもある。

事例2では，コラージュの上側の素材内容は“お城”“崖と山”“岩山”と全体的にがっしりしたものが多く，下側の素材内容は“露天風呂や川などの水”“着飾った少女”“お祭りのイルミネーション”“色鮮やかな花”と全体的に華やかなものと柔らかいものが多い。それはまるで華やかな柔らかいものをがっしりしたもので抑えこんでいるようでもある。ロールシャッハでは表象を物体や美しいものにしており，コラージュにおける物体化の防衛の有り様が，素材内容だけでなく，貼り方つまりどのように構成するかということにもあらわれることが示唆される。また，見方を変えれば，上側が物体化，下側が美化の防衛の有り様を表しているとも言えるであろう。

次に，色彩に対する反応であるΣCを見てみると，事例1ではΣC＝0.5，事例2ではΣ

C＝3.5であった。コラージュの色彩は，事例1はモノクロ写真もあり全体的に抑えた色彩であり，事例2は色鮮やかな明るく華やかなものもあり，青，緑，赤，黄，ピンクといろいろな色彩の素材を使用している。これらのことより，ΣCとコラージュ素材の色彩との関連の可能性が推測される。

次に，ロールシャッハ・テストの総反応数は，事例1は12個，事例2は20個，コラージュの使用切片数は，事例1は5枚，事例2は10枚であった。ロールシャッハ・テストの総反応数とコラージュの総反応数はほぼ対応を示すことが示唆される。

その他に，事例2では，コラージュの素材が全て丸みを帯びた曲線で小さく切断されている。これは，ロールシャッハ・テストで色彩刺激での部分反応優位と関連して考えると，素材という色彩刺激の細分化といえるであろう。これらのことより，コラージュで素材を小さく切ったものばかり使用している場合は，情緒的な刺激を小さく限定しないと扱えない，強迫の問題が背景にある可能性が推測される。

## Ⅳ．おわりに

本論文では，初回のコラージュ作品とロールシャッハ・テストの結果を比較することによってその素材内容と反応内容から，物体化・美化の防衛のコラージュでの表現について，ΣCと素材の色彩との関連，総反応数と使用切片数の対応が示唆された。わずか2事例の臨床例の検討なので，今後，事例数を増やして検証していきたい。もちろん偶然的な表現の生じる可能性を忘れてはならないし，同時に意味のある偶然も心に止めておきたいと考えている。

## Ⅴ．要　約

本論文の目的は，コラージュ作品の分析・解釈方法について検討することであった。そのために，2事例のコラージュの初回作品とロールシャッハ・テストの結果の比較を行なった。その結果，①コラージュの素材内容とロールシャッハ・テストの反応内容の比較をしたところ，コラージュ表現における物体化・美化の防衛の有り様が示唆された。また，それらは，内容だけでなく貼り方によっても表現される可能性が示唆された。②コラージュの素材の色彩とΣCの関連性が示唆された。③コラージュの使用切片数とロールシャッハ・テストの総反応数の対応が示唆された。また，素材を小さく切ることは，ロールシャッハ・テストにおける色彩図版での部分反応優位の関連性から，素材という色彩刺激の細分化が考えられた。

### 注

(1)　コラージュ法には大きく分けて「マガジン・ピクチャー・コラージュ法」と「コラージュ・ボックス法」がある。前者は，用意された雑誌の中から気に入った写真を自分で切りぬくものであり，

後者は，治療者があらかじめ雑誌やカタログから写真を切り抜いてそれを適当な箱に入れて用意しておき，そこから気にいった写真を選ぶ方法である。「大コラージュ・ボックス法」は，岡田が精神科臨床にコラージュ療法を導入するにあたり，患者の自我の弱さや守りの脆弱さを考慮して考案した方法である。あらかじめ治療者によって切り取られた素材が約1000枚用意され，そこからひと掴みずつ素材を手渡し，使われないものはその都度返してもらう。また，それとは別に文字表現として雑誌などから切り取られたキャプションが用意され，その中から好きな言葉を選んで貼ってもらう。これは，心象から言葉への帰路を作ることにより，患者の統合機能を高めるためである。

## 文　　献


馬場禮子（1995）ロールシャッハ法と精神分析―継起分析入門　岩崎学術出版社

河野荘子・岡田　敦（1997）人格の病理とコラージュ表現　成田善弘編　現代のエスプリ別冊　人格障害　至文堂 85-99.

Lerner, C（1979）The magazine picture collage : Its clinical use and validity as an assessment device. American Journal of Occupational Therapy, 33(8), 500-504.

森谷寛之（1990）心理療法におけるコラージュ（切り貼り遊び）の利用―砂遊び・箱庭・コラージュ　日本芸術療法学会誌 21(12), 7－37.

森谷寛之（1993）砂遊び・箱庭・コラージュ―箱庭療法とコラージュ療法に関する雑感　森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕編　コラージュ療法入門　創元社 147-155.

森谷寛之（1999）コラージュ療法におけるアセスメント　森谷寛之・杉浦京子編　現代のエスプリ386号（コラージュ療法）至文堂 51-58.

中井久夫（1993）コラージュ私見　森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕編　コラージュ療法入門　創元社 137-146.

岡田　敦・河野荘子（1997）コラージュ表現とその治療的意義について　名古屋造形芸術大学紀要 3，61－72.

岡田　敦（1999）分裂病者のコラージュ表現について―「大コラージュ・ボックス法」の臨床的利用　森谷寛之・杉浦京子編　現代のエスプリ386号（コラージュ療法）至文堂 118-131.

岡田　敦（1999）「大コラージュ・ボックス法」の実際　森谷寛之・杉浦京子編　現代のエスプリ386号（コラージュ療法）至文堂 78-83.

小此木啓吾・馬場禮子（1989）新版精神力動論　金子書房

杉浦京子・森谷寛之ほか（1992）体験コラージュ療法　山王出版

杉浦京子（1994）コラージュ療法―基礎的研究と実際　川島書店